2006年度授業改善研修参加レポート　　所属（国際コミュニケーション学部）　氏名　加納　寛

「研修会等名称」
日本私立大学連盟　私立大学フォーラム　「国立大学の行方と私立大学のあり方」

場所：明治大学アカデミーコモン
期間：2006 年 9 月 30 日

１．研修の内容

フォーラムの構成は以下のとおりであった。

１．講演（13：00～14：00）
奥 島 孝 康　氏（早稲田大学学事顧問）「国立大学の行方と私立大学のあり方」
２．問題提起（14：10～15：10）
安西 祐一郎氏　（慶應義塾塾長・日本私立大学連盟会長）
「新しい時代における私立大学の挑戦」
相澤 益男 氏　（東京工業大学学長・国立大学協会会長）
「国立大学改革の軌跡と今後の展開」
宮内 義彦 氏　（オリックス(株)取締役兼代表執行役会長、関西学院理事）
「国立大学の行方と私立大学のあり方」
３．ディスカッション（15：30～17：00）
安西 祐一郎氏、相澤 益男氏、宮内 義彦氏、フォーラム司会 奥島 孝康氏

奥島氏の講演においては、「普通教育」に変わってきた学部教育をいかに国際化に対処させるか（コンソーシアムの実現）、私大においていかに大学の「個性」を打ち出していくか（小中高大の一貫教育、スポーツ等を通じた大学の一体感の醸成）、いかに大学の未来を切り拓いて経営していくか（建学の理念の活用、グランドデザイン）といったことが熱く語られた。とくに私大は棲み分けをシビアに考える必要があり、ここに各大学の「個性」が重要な役割を果たすことが最後に強調された。

安西氏の問題提起においては、これからの私大は各大学で自ら選択した「個性」を通じて「活力溢れた多様な人間の育成と新しい多様な価値の創造」をしていくべきであるとの考えが示された。

一方、国立大を代表する相澤氏の問題提起においては、国立大法人化に伴う変化が紹介され、ステイクホルダー（利害関係者：ここでは国民、学生、卒業生、社会など）を重視していくべきこと、各大学が特色を明確にして機能分化していくべきこと、大学評価を積極的に利用して持続的進化をしていくべきことが強調された。

実業界を代表して宮内氏は、「教育＝サービス業」であるという意識の必要性を語られ、ステイクホルダーの重視、特徴ある大学造りを通した大学間競争、ガバナンス体制の構築が重要である旨を強調された。

２．研修の成果

セミナーにおいて全員が強調されたのは、大学の「個性」化の必要性であった。確かに私大は国立大に比して「個性」化の方向に歩むことは容易であり、利点となりえる。これにより、その「個性」にマッチした顧客を引き寄せることも可能であろう（フォーラムでは早慶の卒業生にみられる「大学の個性」が話題となり、多くの笑いを呼んだ)。しかし、全国に顧客予備軍を抱える東京の有力私大においては「個性」化による顧客確保が可能であるとしても、一定の地域的限界を有する地方の中堅以下の私大がすべてこの方向で生きていくことができるとは考えられない。我が愛知大学においては明確な設立趣意書があり「個性」も確立されているが、今後は「個性」を今以上に最大限に活用する方法を模索し、「個性」と顧客確保との関係をシビアに考えていかなければならないだろう。

報告者は、学生の質の変化と私大のあり方の問題について質問した。奥島氏は、今後の大学においては「生活指導」も必要だということを発言された。また宮内氏は、新入社員教育の大変さ（オリックスでも新入社員教育では、朝会ったら挨拶することから教えていかなければならないそうだ）からこの問題に理解を示していただいた。しかしその他の方々には、私が提起した問題は「学力低下」の問題として捉えられてしまった。中堅以下の私立大学では「学力」以前にやらなければならないことが多々あるが（人を殺してはいけないということを教えたり、公共の場所には唾を吐いたらいけないということを教えたり)、壇上の方々の母体となっている一流大学においては、スケボーが授業時間の校舎内を走ったり注意した教員を 110 番通報したりすることはないのであろう。大学の二極化をひしひしと感じた。

３．授業への研修成果の反映状況

経営面の研修であったため、教育実践上の成果反映は必ずしも期待できない。

学 部 長	ＦＤ委員長	ＦＤ委員会	総合企画課長	係